

# 言語資料の観察に基づく文法研究

## — 現代英語表現の諸相 —

大竹 芳夫 言語教育講座

キーワード: 定冠詞, 不定冠詞, 前置詞, *that being said*, 関係詞, 意味論

### 1. はじめに

インターネットの急速な普及とコンピュータの情報処理能力の飛躍的な向上に伴い、言語資料の入手と蓄積が非常に簡便になってきた。その結果、語彙や構文に関する言語事実を解明し言語理論を構築する上で、実際の言語資料を広範にかつ深いレベルで観察するというプロセスは欠かせないものとなりつつある。本研究では、実際に収集した言語資料の観察と分析を通じて、現代英語のいくつかの形式の諸相を明らかにする。研究対象となる言語現象は、定冠詞と不定冠詞の選択、前置詞 *on* の特性、独立した名詞としての *who* などの用法、そして従来の研究ではほとんど論ぜられることのなかった表現“*that being said*”の特性である。

### 2. 定冠詞と不定冠詞の意味特性の相違

日本語は英語とは異なり、冠詞が文法体系に組み込まれていない。そのため、日本人英語学習者にとって定冠詞と不定冠詞の意味特性の理解と適切な選択は容易ではないように思われる。伝統的な記述文法書である Quirk *et al.* (1985) と Huddleston and Pullum (2002) には、英語の定冠詞と不定冠詞の意味の相違に関して下記のような例と説明が与えられている。

- (1) a. A house on the corner is for sale.  
 b. The house on the corner is for sale. (Quirk *et al.* (1985))
- (2) a. Bring me a ladder!  
 b. Bring me the ladder! (Huddleston and Pullum (2002))

(1)と(2)は Quirk *et al.* (1985) と Huddleston and Pullum (2002) の両文法書において、不定冠詞 *a/an* と定冠詞 *the* の対立を例証する導入部分で提示されている例である。Quirk *et al.* (1985) によれば、(1b)の定冠詞を伴う *the house* には売りに出されている家がどの家かを聞き手がすでに知っているだろうと話し手が想定している含みがあるが、(1a)の不定冠詞を伴う *a house* にはそうした含みがないと説明する。Huddleston and Pullum (2002) は(2)の例を引き合いに出し、(2a)の *a ladder* は聞き手の視野に長さの違う2本以上のはしごが入っている状況でどれでもいいから1本取ってくるように話し手が指示する場合、あるいは聞き手の視野にははしごが全く入っていない状況ではしごを取ってくるように指示する場合が考えられるという。Huddleston and Pullum (2002) は聞き手が唯一的に同定できる対象には定冠詞 *the* を付与できるが、唯一的に同定できない対象には不定冠詞 *a/an* を付けると説明する。

実際の言語資料において、こうした文法記述を裏付ける興味深い言語現象が観察される。たとえば、小説から収集した次の例を観察しよう。なお、次例の斜体字部は原文表記のままである。

- (3) “The Beechcraft,” he whispered. *The Beechcraft*, he’s said, not *a Beechcraft*. [...] “Are you sure? Is that ...” I tried to swallow the lump in my throat. “Check the tail number.” He didn’t check. He didn’t have to check. We both knew what we were looking at. It was one of Dickie Flynn’s surveillance tapes of the ramp, the one from March 15, 1995. That was the night that Flight 1704 crashed outside Baltimore. This was the Beechcraft that had gone down, and this was our ramp it was parked on.

(L. Heitman, *Hard Landing*)

上記の小説の引用部分において、冒頭部の““The Beechcraft,” he whispered. *The Beechcraft*, he’s said, not *a Beechcraft*.”という部分に注目されたい。原著の著者自身が定冠詞と不定冠詞を斜体字で表記していることから、両者を意図的に峻別していることは明らかである。(3)は、相手が記憶の糸を手繰りながら“*The Beechcraft*”と小さな声で話した直後の場面である。話し手は「あのビーチクラフト機(=*The Beechcraft*)」と彼は確かに言った。単に「ビーチクラフト機(=*a Beechcraft*)」と言ったのではなく。」と心中で相手の言を整理し、相手がビーチクラフト機を不定冠詞の *a* ではなく定冠詞の *the* で合図した事情を分析している。Quirk *et al.* (1985)と Huddleston and Pullum (2002)が説明するように、不定冠詞とは異なり、定冠詞の *the* には後続する名詞句の指示対象が聞き手に唯一的に同定できると話し手が想定する場合に用いられるという意味特性がある。上例では、相手が *Beechcraft* を *the* で合図したことを聞き逃さなかった話し手が、相手の心中において同定済みのビーチクラフト機が話し手の念頭にあるビーチクラフト機と同一の指示対象であるのかを確定しようとする認識過程が表現されていて興味深い。最後まで読み進めると、相手にそのビーチクラフト機の尾翼番号を思い出してもらうまでもなく、バルチモア沖合いで墜落したビーチクラフト機 1704 を“*the Beechcraft*”が指示しているという推論の帰結を共有知識に基づいて話し手が下していることが確認できる。

本節では不定冠詞と定冠詞の対立を示すひとつの実例を示したが、実際の言語資料は文法規則を演繹的のみならず帰納的にも証明するのに役立つ言語事象を自然な形で提示してくれる。言語資料の観察と分析は文法研究に役立つにとどまらない。コミュニケーション能力の育成を目指すこれからの言語教育では、Larsen-Freeman (2003)が主張するように形式(form)、意味(meaning)そして使用(use)の3つの側面をバランスよく教授することが肝要である。最近の言語学の研究成果を言語教育に反映するとともに、こうした実際の使用場面での用例を積極的に提示しながら、学習者の文法意識を高揚する工夫と努力が求められると考えられる。

### 3. 接触を合図する前置詞 *on* の特性

Lakoff たちによる最近の認知言語学の研究成果によって、英語の前置詞の興味深い特性が明らかにされてきた。英語の前置詞と日本語の助詞は一対一の対応をするわけではない。英語母語話者がそれぞれの前置詞の相違をどのように認知し、どのような原理的基準で使い分けているのかは日本語母語話者にとって容易には理解できない。高校生や大学生の英作文指

導を通じて筆者自身が気づいたことであるが、日本人学習者が間違いやすい前置詞の選択に **with** と **on** があるのではないだろうか。次の例を考えよう。

- (4) a. Stop eating **with** your fingers.  
 b. You can fix it **with** your screwdriver.  
 (*Longman Advanced American Dictionary*)
- (5) a. I cut my hand **on** a piece of glass.  
 b. Did you make these graphs **on** a computer?  
 (*Longman Advanced American Dictionary*)

(4a-b)はそれぞれ「指でものを食べるのは止めなさい。」「それをねじ回しで固定できますよ。」という意味を表わし、(5a-b)は「私はガラスの破片で手を切ってしまった。」「これらの図表をコンピュータで作成したのですか?」という意味を表現する。これらの日本語訳の下線部から明らかなように、英語の **with** と **on** はいずれも助詞の「で」とよく対応する。このような英語と日本語との間に一対一の対応関係が成立していない事実と相俟って、日本人英語学習者は(4)のような「道具を合図する」**with** の用法を先に学習し、(5)のような **on** の用法を後で学習するという学習時期の相違もある。そのため、(5)のような意味を表現するのに **on** ではなく **with** を用いるという誤りをしばしばおかしてしまうと考えられる。

上記のような前置詞 **with** と **on** の峻別に関しては、認知言語学的視点からの説明が役立つ。具体的には、英語の前置詞 **with** は付随を、**on** は表面接触を合図するというそれぞれの基本的意味の相違があり、主に手で扱われて動かされることで何らかの動作に関わる事物は **with** で合図されるが、動かされず固定されてその表面を活性領域として何らかの動作に関わる事物は **on** で合図されるという中右 (1994;2004a;2004b)の認知言語学視点からの考察が端的に両者の違いを説明する。

では実際に収集した言語資料をもとに、動かされず固定されてその表面を活性領域として何らかの動作に関わる事物が **on** で合図される用例を観察しよう。表面が活性領域として認知されるものに楽器がある。英語では楽器が **with** ではなく **on** で合図されて演奏行為との関わりを示すという事実がある。

- (6) a. At home his mother played some "light classical" **on** the piano but it was his father who "needed" music. (*The Guardian*, December 28, 2004)  
 b. Sometimes he played Bach and Mozart for us **on** the piano.  
 (*The Guardian*, June 5, 2004)

(6a-b)は鍵盤楽器であるピアノで楽曲を演奏する場合にピアノが **on** で合図されてピアノの鍵盤という表面領域が活性化されていると考えられる。**with** で合図される道具とは異なり、ピアノ自体が手で上下左右に動かされるなどして演奏行為に関わるということは決してない。次は管楽器の例である。

- (7) a. She's trying to play this Debussy thing on the flute but she can't get it right. (The Guardian, February 23, 2000)
- b. Sometimes, one would play a blues tune on the harmonica. (U.S. News & World Report, November 30, 1998)

(7a-b)が示すようにフルートやハーモニカなどの管楽器であっても英語では **on** で合図され、**with** で合図されることはない。ここでもやはり、ピアノと同様にフルートの表面の鍵を指で操作したり、ハーモニカの表面の簧を吹いたり吸ったりすることで演奏行為を行うと認知されるからである。次いで、弦楽器もまた **on** で合図されることを確認しておこう。

- (8) a. I have to make noises on the violin with a small brush, and tap the wood, like walking in a wood at night. (The Observer, April 16, 2000)
- b. Like all sons of accountants I had learnt to play 'Working Class Hero' on the guitar and wore the Lennon specs that came free on the NHS. (The Observer, December 3, 2000)

(8a-b)が示すように弦楽器のヴァイオリンやギターも弓や爪が楽器表面の弦と接触することにより音が発生することから **on** で合図されることが確認できる。打楽器はどうであろうか。

- (9) a. Inspired by the sound of the churchbells and the rhythms played on the drums in the Candomble church in his district, he started off by hitting out rhythms on tin cans - something he still does as part of his performances. (The Guardian, July 8, 1999)
- b. A series of beautifully detailed drawings shows a chap waking up, having breakfast, going to work with his instrument case, joining the orchestra, and, at the climax of his day, playing a single note on the triangle. (The Guardian, July 6, 2000)

(9a-b)ではドラム、缶詰の空き缶、トライアングルが **on** で合図されており、それらの表面が演奏行為の基盤として表現されていることがわかる。ここでも **on** が使用されているのは打楽器のトライアングル自体は吊るされて固定されて、奏者がその表面を叩く事により音が発生するのであり、トライアングル自体が演奏者の手にもたれて上下左右に動かされて音が発生するわけではないからである。また、(10)に示すようにシンバルのようにお互いを打ち合わせて音が発生させる打楽器であっても **on** で合図されることが確認できる。

- (10) Well I'm just basically keeping this kind of pattern on the cymbals where I'm ringing the bell all the time, playing on the cymbals and the bell. (http://www.pbs.org/lflc/backstage/july1/riley.htm)

中右 (2004a;2004b)は認知言語学視座から「どの楽器にも共通して、〈演奏者〉が〈楽器本体〉に働きかけ接触行為を遂行することによって音楽を作り出す、という基本構図がある。ここで **on** を用いるのは〈面的接触〉が楽器演奏の根幹をなすからである」と分析している。しかしながら、興味深いことに楽器すべてが **on** で合図されるわけではないという点に注意しよう。たとえば、楽器自体を振ることで中の種子同士を衝突させてリズムを刻むマラカスやシェイカーは、(11)のように **on** で合図されることもあれば、(12a-b)のように **with** で合図されることも確認できる。この言語事実は、英語母語話者の認知の仕方の違いが言語表現の選択に反映されることを裏付けている。

- (11) Making a sound **on** the maracas appears quite easy, but to play correctly and achieve a clean sound can be quite difficult to the novice. Music notation can only capture one aspect of the playing.

([http://www.lpmusic.com/Play\\_Like\\_A\\_Pro/Tech\\_Support/maracas.html](http://www.lpmusic.com/Play_Like_A_Pro/Tech_Support/maracas.html))

- (12) a. The band became the boys' ad hoc answer to the routine of isolated prep-school life. Along with Rand and Prouty on guitar, it featured Radcliffe on the piano, classmate Peter Land on drums and Gagarin **with** the maracas. And of course, there was that guy on the bass. Even then, Kerry stood out. He caught **on** quickly and was soon an integral part of the Electras.

(<http://www.mtv.com/news/articles/1485690/20040311>)

- b. Let your child enjoy making sounds **with** the shaker, or make up rhythms, or keep time to some music on the radio.

([http://www.wqed.org/mag/columns/neighbor/0300\\_neighborhood.shtml](http://www.wqed.org/mag/columns/neighbor/0300_neighborhood.shtml))

たとえば、(12a)では「ラドクリフはピアノ、ピーターはドラム、ガガーリンはマラカス…」と奏者と楽器が披瀝される場面であるが、ギター、ピアノ、ドラム、ベースが **on** で合図されているのに対して、マラカスだけは **with** で合図されて峻別されていることが確認できる。

本節の諸例が示すように、楽器は演奏行為に関与する場合に **on** で合図されるのが基本であるが、手で楽器自体を振ることで演奏行為に関わるマラカスのような楽器は **with** で合図される。道具はその形態や用途によって **tool**、**instrument**、**utensil** などと英語では区別されるが、固定されてその表面を活性領域として何らかの動作に関わる事物は **on** で合図されるという単純な認知的基準を英語母語話者が持ちあわせていることが確認できる。

#### 4. **who, what, why, where, how** の独立名詞としての用法と意味特性

現代英語でその使用が確認されるにもかかわらず、辞書や文法書の記述に十分に反映されていない表現形式が存在する。たとえば、**who, what, why, where, how** の独立名詞としての用法がその例である。『小学館プログレッシブ英和中辞典』は **who** の独立名詞の用法に対して次のような説明と用例を与えている。

## (13) 図《the ~》関係者, (話題になっている) 人

I will ask him the ~ and the why of it. 彼にその件の関係者と理由を尋ねてみよう。  
(『プログレッシブ英和中辞典』)

一方、コーパスデータベースを活用したとされる最近の学習英和辞典『ウィズダム英和辞典』は **who** の独立名詞の用法に対して次のような用例を示すにとどまり、(13)のような **who** の用法には言及していない。

- (14) 4. [関係代名詞；先行詞を含む用法] a. [関係節内の補語として]...である人→  
She's not **who** people think she is. 彼女はみんなが思っているような人ではない。  
/ Those experience have made me **who** [what] I am. そうした経験のおかげで今の私がある。 b. (古) ...する人(he who); ... する人はだれでも(anyone who)  
(『ウィズダム英和辞典』)

*Collins COBUILD English Dictionary*, *Longman Advanced American Dictionary* には **who** の独立名詞の用法に関する記述は見当たらない。このように、従来の辞書においては **who** の独立名詞用法の取り扱いは統一的ではない。さらに、(13)で見たように **who** の独立名詞用法を記載する『プログレッシブ英和中辞典』には定冠詞 **the** を伴うという表記が付されているが、実際の言語資料を観察すると **who** の独立名詞用法にも他の名詞と同様に定と不定が区別されていることが確認できる。次の談話を下線部の表現に注意しながら観察しよう。

- (15) “Tell us what you know, Angelo, and I’ll get you whatever you want.” [...] “There’s two parts to this story,” he said finally. “There’s who killed her, and there’s why. I’ll give you the who tonight. You get me my deal and I’ll give you the rest.”  
(L. Heitman, *Hard Landing*)

(15)では、**there** 存在文の意味上の主語位置に **who** と **why** が先行詞を伴わず独立して現われている点、さらには初出の **who** には定冠詞 **the** が付されていないが後続する文中では **the who** と表示されて完全な定名詞句の扱いを受けている点に注意されたい。(15)の当該部は「この話にはふたつの重要な部分がある。彼女を殺害した人物(**who**)と理由(**why**)である。今夜はその人物(**the who**)をあなたにお知らせしよう。」といった意味になる。これらの **who** や **why** は完全に独立した名詞句として用法であり、意味的観点からも **there** 存在文の意味上の主語位置に立つ **who** や **why** には定冠詞が付与されず新情報として談話に導入されているが、次文で再度その **who** が言及される際には定冠詞が付与されて定性を帯びている点が興味深い。

もうひとつの手元の用例を観察しよう。なお、次例の斜体字部は原文表記のままである。

- (16) “If having a boyfriend makes you bad, we’d all be in trouble.” “Oh, it’s not the what that bothers him, it’s the who.” She raised her dark eyes, and I realized this was the point she’d been building to all along. “Do you know who it is?” “It was Lenny.”  
(L. Heitman, *Hard Landing*)

(16)では“the what”と“the who”が用いられて、「もしボーイフレンドがいるのせいで機嫌が悪いというのなら、みんなが困ってしまうわ。」と話す相手に「彼が心配しているのはボーイフレンドがいるというその事実(the what)ではなく、その相手の人物(the who)なのよ。」と話し手が応じている。(16)の what と who に定冠詞が付与されているのは、先行する相手の発話の中でボーイフレンドがいるという事実が述べられているため、両者が定性を得たからである。このように who の独立名詞の用法には定冠詞を伴うものと伴わない場合とがあることが確認できる。そこで、定冠詞を伴わない独立した名詞としての who の用法をまず見てみよう。

(17) Deep Throat: Hmmm. Well, there's who really shot JFK, for starters.

(<http://espn.go.com/page2/wash/s/questions/deepthroat.html>)

(17)は「まず最初に、JFK を実際に狙撃した人物がいるのです。」という発話であるが、there 存在文の意味上の主語位置に無冠詞の who が現れている。英語の there 存在文の意味上の主語位置には新情報を担う名詞句が生ずることから、先に観察した(15)の用例と同様に、新情報を担う who はその不定性のために the が付与されないことがわかる。

手元の言語資料から、形式的に関係代名詞ではなく独立名詞用法としての who や what、why、where、how の実際の使用例を下記に示しておく。

(18) a. For our part, we in the media must reward openness and try harder to communicate the complex policy decisions politicians face. We should ensure that we have explained the 'who', the 'what', and the 'how' before rushing into the 'Why are they saying this?'

(*The Observer*, August 28, 2005)

b. In Lebanon I found out both the who and why surrounding his death.

(*The Observer*, November 11 2001)

c. 'The money we have got so far is nowhere near enough to fund our case in the Dublin High Court. It's already taken £100,000 to pay for the research into the who, what and where of the massacre.

(*The Observer*, March 25, 2001)

d. Scientists may not know the how or the why, but they do know the what of Earth's descent into the deep freeze.

(*U.S. News & World Report*, August 18, 1997)

従来の記事文法書を調べてみても、the の付された who、what、why、where、how の独立名詞としての用法についての十分な説明は見当たらないように思われる。さらに、the の付されていない who の用法についても記事文法書では後続する節の修飾を受けて主格補語として働く who の事例のみに言及するにとどまっている。

たとえば、Declerck (1991)は主要部を欠いた名詞的關係代名詞節全体が主格補語としての役割を果たしている場合は、who を用いることができると指摘し、次の例を挙げている。

- (19) You're not who people think you are. (Declerck (1991))

(19)は「あなたは世間で思われているような人ではない。」といった意味を表わし、形式的には **who** は **you are X** の補語 **X** の位置から関係節化を受けているがその先行詞は表面には現れていないと Declerck (1991)では分析されている。同様の言語現象に対して、Huddleston and Pullum (2002)は次のような例を引き合いに出して異なる角度から分析している。

- (20) a. That's who I meant.  
b. He's not who she thinks he is. (Huddleston and Pullum (2002))

Huddleston and Pullum (2002)によれば、主節の **be** 動詞の補語位置に現れる(20a-b)の **who** はそれぞれ“the person I meant”、“the person she thinks he is”と言い換え可能であり、形式的には疑問詞と分類されると主張する。こうした **who** が関係代名詞であるのか疑問詞であるのかという形式的特性については本研究では立ち入らない。しかしながら、先行詞を含む **who**、つまり独立名詞としての **who** には、実際はもう少し広い形式と意味の特性が認められるように思われる。次の談話における“that's who”の使用を観察しよう。

- (21) “Why can't I say I was with you?”  
“Because you weren't.”  
“Who'll know the difference?”  
“The ticket girl at the Orpheum, that's who. We went down and bought tickets for the afternoon show, [...]” (D. Tartt, *The Secret History*)

(21)では、先行詞を伴わない **who** の用法が確認できる。「私たちの意見の相違についての真相を知っている人物は誰だろう。」という相手の問いかけを受けて、「オーフィウム劇場のチケット売りの女性、その彼女こそが真相を知っている人物だ(that's who)。」と話し手が述べている場面である。(21)の先行詞を伴わない **who** は後続する明示的な節を伴わずに独立して生起している点で、Declerck (1991)や Huddleston and Pullum (2002)の考察対象とする **who** とは異なる。(21)は次のように書き換えることができよう。

- (22) That's who'll know the difference.

このような **who** に対して、先行詞を含む用法あるいは先行詞を欠く用法と分析することも可能であるが、意味的に考えるならば先行詞の意味内容が非常に希薄であるために表面に現れていないと考えることもできるであろう。

このような例も含めて考えるならば、**who** が後続する節内の情報や先行する文脈の情報により十分に具体化されてはいるが、特定の人物ではなく想定上の人物に言及する場合には具体的な人物を指示する意識が希薄になるために、先行詞が余剰となるのかもしれない。こうした現象の背後のメカニズムの解明については、稿をあらためて論ずることにしたい。

## 5. **That being said** の意味と用法

実際の言語資料を観察すると、辞書や文法書に言及されていない英語表現がしばしば確認される。下記の(23)は筆者がアメリカ人英語母語話者から最近受信した e-mail の一部である。下線部の表現形式に注意されたい。

- (23) Greetings from Salt Lake City! I hope that you are doing well and enjoying a beautiful summer. I'm happy that the exchange program between the University of Utah and Shinshu University is functioning smoothly. That being said, I have a student who wishes to participate in the exchange program with Shinshu University.

(23)の下線部“**That being said**”は「それはさておき」、「それはそれとして」とでも訳すべき表現である。「夏休みを有意義にお過ごしのことと思います。ユタ大学と信州大学との交換留学プログラムが順調に機能しており嬉しく思います。それはさておき、信州大学への交換留学を希望している学生が本学に1名おります。」といった意味を表わす。この例において、“**That being said**”は先行する叙述内容と異なる内容を追述する導入機能を果たす表現形式であると仮定できる。この表現形式は筆者の知る限り学習英和辞典やイディオム辞典にも記載されておらず、日本人英語学習者にとってその意味を容易には理解しがたいのではないかと思われる。“**that being said**”と同種の表現形式に“**all that being said**”、“**(all) that having been said**”、“**(all) that said**”を挙げることができる。この表現形式に言及している論考に金子(1991)がある。金子(1991)は“**That said**”は“**That having been said**”、“**Although that was said**”の省略形であり、“**That said**”より前に述べたことに対して訂正するような意味合いの言葉を書き加える場合に使うものらしいと述べ、「そう言ったけれども」といった意味に相当すると論じている。金子(1991)では“**That said**”が完了分詞表現や過去時制を含む表現に相当するものと分析されており、(23)のような分詞形は考察の対象とはなっていない。しかしながら、この表現を用例とともに具体的に指摘して論じた最初の研究であると思われる。“**That being said**”及び同種の表現形式は書き言葉でも話し言葉でも用いられる。実際に収集した言語資料を観察してみよう。

- (24) a. 'The tackle was in the heat of the moment,' he said in a statement. 'I did not go over the ball and I did not mean to hurt Ben Thatcher. That being said, however, I did deserve to be sent off and I apologise to my team-mates and the boss.' (The Observer, December 7, 2003)
- b. It usually takes the form of redundancies among the workforce. The executives who resign receive huge bonuses. All that being said, most of the economy has to be subject to market forces. (The Guardian, March 22, 2004)

- c. "The NFL is going to have a say on who's going to come here. The Coliseum has no role in selecting a team," Parks said. Asked when it might happen, Parks replied: "I don't know. Nobody's signed anything. They've got to say they're coming." That being said, Parks expressed optimism. "In my judgment, I don't believe these business people waste their time and money," he said. "They've spent a lot of time and money."  
(USA Today, November 10, 2005)

(24a)では、スポーツの試合でタックル行為をしてしまった話し手が、タックル行為がはずみであったことと相手選手を負傷させる意図はなかったことを告白した後で、「とりあえずは、そうは言っても(That being said, however)」と繋ぎ、話し手のそうした行為は退場に値するものでありチームメイトと監督に謝りたいと続けている。注意すべきは接続詞 *however* を用いることで「とりあえずは、…」と話を別な角度から表現することを合図しつつ、“That being said”により先行する叙述内容を一応は認めながらも異なる内容を追記していることである。(24b)では、辞職する経営幹部は多額の特別手当を受け取るという事実を伝えた後で、「とは言え(All that being said)」と繋ぎ、経済的節約の多くは市場の実勢相場の影響を受けることになるかと続けている。(24c)では、NFLに精通する専門家がNFLの先行き不透明感を表明しながらも、「そうは言っても(That being said)」楽観視できる面があることを書き手が伝えている。

次は完了分詞を含む“(all) that having been said”の例である。

- (25) a. It's vital you don't restrict your food intake during pregnancy - not only will this potentially stunt your baby's growth and development, but you'll probably feel so exhausted when your baby's born that you'll be in no fit state to enjoy motherhood. That having been said, the following guidelines may help you to avoid putting on too much weight.  
(The Observer, August 26, 2001)
- b. We did not need the Telegraph - or anyone else - to help form our view, which was conveyed to Rod the day his column was published. Further, we were due to discuss with Rod the consequences of the piece with a view to making him choose whether he wished to continue as editor of the programme or as a columnist. All that having been said the coverage given by the BBC to the march - on Today as elsewhere - was appropriate and impartial and we reject the criticisms made by the Telegraph and others.  
(The Guardian, October 1, 2002)

(25a)では、妊娠中の女性が食事制限をしないことは胎児の成長や自分の出産時の疲労を考えると自然なことであると述べた後で、「そうは言うものの(That having been said)」一定の指針を守れば太りすぎるのを未然に防ぐことができると表現している。(25b)では、自社記事に対する不適切なコラムを書いた大衆新聞 Telegraph のコラムニストを批判した後で、書き

手は「それはさておき(All that having been said)」と繋ぎ、BBCの報道内容が真実を伝えており Telegraph 誌などの批判を受けつけないと述べて論の本筋に戻している。完了相を用いて“All that having been said”と表現されるのは、先行する叙述内容を完結させてから論を展開するという話し手の意識の表れを示している。実際に(25a-b)の“(all) that having been said”の先行内容は情報量が豊富であり単純であるとは言いがたいように思われる。

次に“(all) that being said”、“(all) that having been said”とは異なり、分詞形を伴わない“(all) that said”について観察しよう。

- (26) a. The Isles have given up a lot of goals so far, and DiPietro should take some blame for that. That said, he is fundamentally sound and will only get better as he matures further. Plus, he's miles and miles ahead of Isles' backup goaltender Garth Snow in terms of pure talent.

(USA Today, November 16, 2005)

- b. I have no idea how old he is, nor what he looks like. I don't know any of his personal history. All that said, I feel that I'm as qualified as any other contender here to be his First Lady! Heck, I'm more qualified: I'm young, have never been married, have no children, am Ivy League educated, am self-supporting, and drive a really cute car.

(<http://www.harpers.org/ThePersonalsPolitical.html>)

(26a)の“That said”は being が省略された分詞節であると考えられ、ある選手は不振であるので非難されるべきであるが、「とは言え(That said)」適切な判断ができて将来性があるということが述べられている。(26b)の“All that said”も being が省略された分詞節であると思われ、相手の男性の年齢や外見や履歴書は知らないが、「それはそれとしても(All that said)」彼の夫人になるにふさわしい女性は私をおいてはいないということが伝えられている。

さて、分詞形を伴う“(all) that being said”、“(all) that having been said”が主に書き言葉で用いられるのに対して、“(all) that said”は書き言葉でも話し言葉でも使用される。(27a)は映画の台詞、(27b)は新聞からの用例である。

- (27) a. John Crichton: They say it's a lucky or an unambitious man who goes when he's ready. That said, Scorpius is gone. I'm at peace.

(Farscape (1999)の台詞)

- b. Indeed, evidence of abuse of power has increased at such an alarming rate that a priority must be a policy that not only addresses the underlying the concerns of this young population but institutions like the police. That said, the situation is changing.

(The Observer, November 6, 2005)

最後に次のような with を伴う“that being said”の変種も存在するので指摘しておきたい。

- (28) “We’ve remained at a heightened state of alert since Sept. 12 (2001),” said Ciavolella. “With that being said, security is an evolving process based on any new information that may come in.” (*The Observer*, August 10, 2005)

(28)の“with that being said”は付帯状況の with を伴う分詞構文であると考えられる。

本節で取り上げた英語表現はこれまでの記述文法書や辞書にはほとんど取り上げられてこなかったように思われる。意味論的、語用論的側面に関する詳細な分析は今後の研究において引き続き解明することにするが、実際の言語資料を示しながら確認したように“that being said”という表現が現代英語の談話で頻用され、分詞構文、受動態、伝達動詞 say の特性を活かしながら興味深い語用論的特性を示すことは明らかである。

## 6. まとめ

現代英語のひとつひとつの語彙や構文の特性を解明するために、今やインターネット上のデータベースの活用は欠かすことができない。本研究では、実際に収集した言語資料を観察しながら、談話における定冠詞と不定冠詞の選択、前置詞 on に関する認知言語学的視点からの特性、独立名詞としての who などの用法、そしてこれまでの研究ではほとんど取り上げられてこなかった“that being said”の特性について詳細に分析した。会話や文章などの言語資料を活用しながら現代英語の文法規則を解明しようとする姿勢は、辞書や文法書の記述に貢献するのみならず、実際の使用場面を重視しながら言語運用能力の伸長を目指す英文法指導の必要性の高まりと相俟って、今後ますます高く評価されるべきものと考えられる。

## References

- Declerck, R. 1991. *A Comprehensive Descriptive Grammar of English*. Tokyo: Kaitakusha.
- Huddleston, R. and GK. Pullum. 2002. *The Cambridge grammar of the English language*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 金子稔. 1997. 『現代英語・語法ノート II』 東京：教育出版.
- Larsen-Freeman, D. 2003. *Teaching Language: From Grammar to Grammaticing*. (Teaching Methods Series). Boston, MA: Heinle & Heinle
- 中右実. 1994. 『認知意味論の原理』 東京：大修館書店.
- 中右実. 2004a. 「言語と認知と文化のインターフェイス:なぜ in a car なのに on a bus なのか」 Unpublished Manuscript. 筑波大学最終講義資料 (2004年3月5日).
- 中右実. 2004b. 「言語と認知と文化のインターフェイス:なぜ in a car なのに on a bus なのか」 『英語青年』 第150巻第6号, 348-352. 東京：研究社
- Quirk, R., S. Greenbaum, G. Leech and J. Svartvik. 1985. *A Comprehensive Grammar of the English Language*. London: Longman.

## Dictionaries

- Collins COBUILD English Dictionary for Advanced Learners*. 2001. London: Harpercollins.
- 井上永幸・赤野一郎編. 2003. 『ウィズダム英和辞典』 東京：三省堂.
- 小西友七・安井 稔・國廣哲彌編. 1997. 『プログレッシブ英和中辞典』 東京：小学館.
- Longman Advanced American Dictionary*. 2002. London: Longman.